

第一編  
竹島視察ニ關スル報告

武備第三艦隊司令部 刻令 三月廿六日

一 貴官ハ橋立ヲ率ニ佐世係鎮守府ヨリ派遣セシ建築科

員ヲ便乗セシ便宜出發之ヲ竹島ニ送致セシ

二 右派遣員ノ上自々ノ地点發航後丸便ヲTN地矣知ノハ云

三 右派遣員別紙官房機密券方五七号ニ依假設望樓ノ設

計ニ從事ス貴官ハ之ニ相當ノ便宜ヲ謀ヘシ

四 右設計ニ関シ其裝置方及望樓負生活ノ難易其他保護

等ノ點ニ設計方迄石ノ判斷ニ任ス

五 前諸項ノ任務ヲ終ラシ直ニS地点ニ回航ニ戦闘任務ニ堪

得ルノ程度ニ於テ修理ヲ完成セシ東部TN地矣ニ帰來セシ

六 竹島視察ニ関ス莫見書ヲ直接佐世係鎮守府ヨリ長

官ニ提出スル同時ニ本職ニ提出スル

茅三熊隊司倉長片岡吉郎

官房機密第六五七号

今般松島望橋可成遠距離通達目的ヲ達シ得ベキ無線電  
信機ヲ整備シ別迎日湾口冬外串及リヤンポル岩冬一電橋  
ヲ假設シテ松島リヤンポル岩及高崎山望橋間海底電信ヲ敷  
シ竹濱望橋ノ無線電信ハ之ヲ冬外串ニ移轉ノ計畫有之候  
處ナリヤンポル岩ノ状況圖シテ別紙對馬艦長視察報告外  
何等現状、微ニテノ無之付貴府ニ於テ便宜同表ノ電況ヲ取  
心實際望橋リ及設シ得ヤヤ夜ヤリ破メ及設シ得モトク之ヲ設  
針及豫算ノ大體並ニ工事ノ西セテ日教等ヲ具シ御通報  
度比設及御照會候也

明治三十八年六月三日

海軍大臣 齋藤 實

伏世平鎮守府司長官殿爲首規啟

自而因岩之反致之平望樓建物、充分落敷シテ之ノ際  
出セタガ旗竿ノ如キモノ必要ニ場合ノ使用シ得ル様計  
畫相成度將又望樓設置ノ上、隙岐國ニ三石噸流  
船一隻ヲ常置シ望樓船ノ以共等ヲ計ラシムルコトニ  
一法カト存候此旨申添候也

竹島視察報告

一、官、第艦隊司令長官より橋立ヲ率升佐世保鎮守府ヲ  
派遣セル建築科員ヲ便乗セシメ之ヲ竹島ニ送致セルト今  
時、今島ニ假設望樓設置方適不ノ判断任ズレトノ訓令ヲ  
受ケ十二日午後竹敷出發翌十三日午後二時若直々建築  
科員ヲ今島ニ送ルト今時、橋立艦長ニ命ジ將校ヲ派遣セル  
之ガ視察ヲヤサシキ

二、艦上ヨリ視察スル所、橋立艦長報告并ニ建築科技手ノ  
報告ヲ綜合シテ東西兩島ヨリ成ル竹島ニ假設スル望樓建  
設ニ關シテ意見開陳ス

(一) 西嶋、東嶋ヨリ稍高リ約四十餘呎ニ至リ田舎断崖絶

壁ニシテ到底擬年登る能ハズ又望樓ヲ設置シ得ル餘地  
 下ツ認メズ且ツ視察高角日雲而務其頂上ヲ隱蔽シテ  
 二微スル假令望樓位置ヲ其頂上ニ置キ得ルトスル雲霧  
 才キノ日下ヲサバ常ニ視界ノ妨害ヲ免レサル下推判ス  
 (四)東嶋ハ西嶋ヲ稍低ク且ツ小トモ高ホ高サ約三〇二五  
 呎ニシテ頂上近ク望樓建設ノ餘地凡クナク其南方ハ  
 稍斜面ヲナシ且ツ西方ハ凹岸ニシテ湾形ヲナス此小舟  
 ヲ附ケ得テ交通ノ便アリ唯望樓位置ヨリ方位西北西  
 ヲ中心トシ左右三三度位ノ間視界ヲ西嶋ニ遮断セリ  
 才憚ム然レモ西嶋頂上ノ如ク雲霧ノ爲メ隱蔽サルハ  
 可ハクササト信ズ

以上ノ状況ニテ望樓建設ノ位置ハ東嶋ヲ以テ適當ナルト  
 認ム

三、望樓設計装置

望樓ノ設計装置ノ方法ニ於テ建築科技術ノ設計ヨリ適  
當ナルト認ム

本設計ニ先石ヲ掘リ下ゲ望樓負託所アリ其内ニ水罐蒸溜  
水器糧食薪山灰貯藏所アリ又別見張所旗竿(旗竿ハ  
起伏自由ノ装置)等下リ其詳細ノコトハ此ニ限ル

四、望樓負生次ノ難易

山竹島ノ如キ孤島ニ於テ生活ニ最モ必須ナル飲料水ナリ之ヲ供  
給ニ適應シ蒸溜器ヲ使ハテ且ク数ヶ月分ノ糧食ヲ貯藏  
シメ而シテ月ニ一回若クハ二回汽船ヲ派シ之ガ補給ヲサグ取ル  
島望樓負ノ生次ニ於テ左程困難ハアレルモト認ム現ニ本  
邦ノ漁夫数千人ノ島ニ在リテ海狗捕獲ニ従事シ且ク其  
ノ迄ニ致スバ彼等ハ毎年四五月中旬頃より八月中旬頃迄ノ



向と毎月一回陸歧島より和船ヲ以テ交通シ糧食ノ補給ヲ受ク  
此島ニ生活シ居ルコトヲ

四初メ荒天ニ際シテ或ハ怒濤全島ヲ洗ヒ人類ノ居住生活天南也  
セヤノ疑念アリシモノ視察所ヨリハ相當ノ設計ヲ以テセバ左程ノ  
困難ニテラカレトナリ

### 五 望樓建造ノ保護

保護ノ点ニ於テハ望樓ノ建設ヲ堅固ニシテ地ト汽船交通ノ  
便ヲ計ルコト等ナリ唯洋中ノ一孤島ニテ海上平穩ナル日亦  
六汽船ノ交通ノ隨ハ困難ナルニシ殊ニ冬季中日海北風  
流行ノ季節ニ際シテハ一層ノ困難アルニシ依テ此季節ニ處  
スノ方法ヲ講ジ以テ充分ニ之ヲ設備シテ必要ヲ認ム

六別紙見取圖橋立船長報告並ニ建築科技手報並  
橋後見位置圖ヲ添付ス

右報告

明治三十八年六月十四日

第三艦隊司令官武富邦鼎

佐世保鎮守府司令官鯨嶋員規殿

海

軍

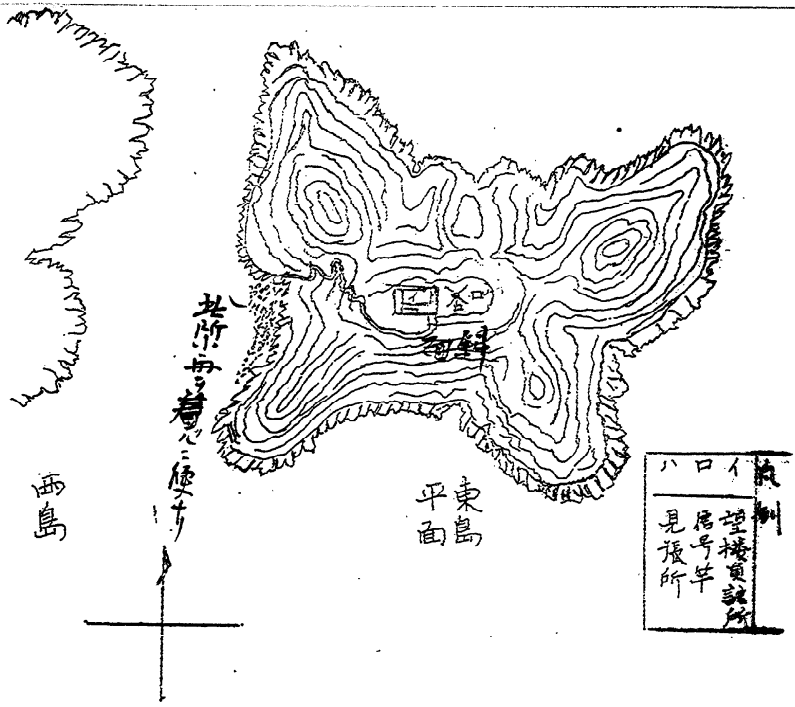
竹島視察報告

リヤン下末の樹計後島、東方より稍南方に偏して東西二島、介  
西島間ノ距離約百五尺ナリ、西島は海上より高サ約四十餘尺に  
テ断岩絶壁宛カズ剣ヲ立テカガ如ク到底絶頂ニ攀登ス能ハズ  
且ツ平地等モ見當ラズ材料物品ヲ運搬ス出戻難キヲ見ル東島ハ  
油面より絶頂迄約三百二十五尺にシテ中央ニ高サ方尺ノ南壁セバ柱橋  
該所トシテ適當ナル位置ヲ有スルベク又是レより東方約三十間ノ處ニ高  
地ハ信幡旗竿及見張所等ヲ建設スルニ適當ナル地ナリ  
以上ノ状況ニ依リ判断スルニ柱橋建設ハ東島より適當ナリ存  
ラレ候條此段御参考ナシニ意見申上申候也

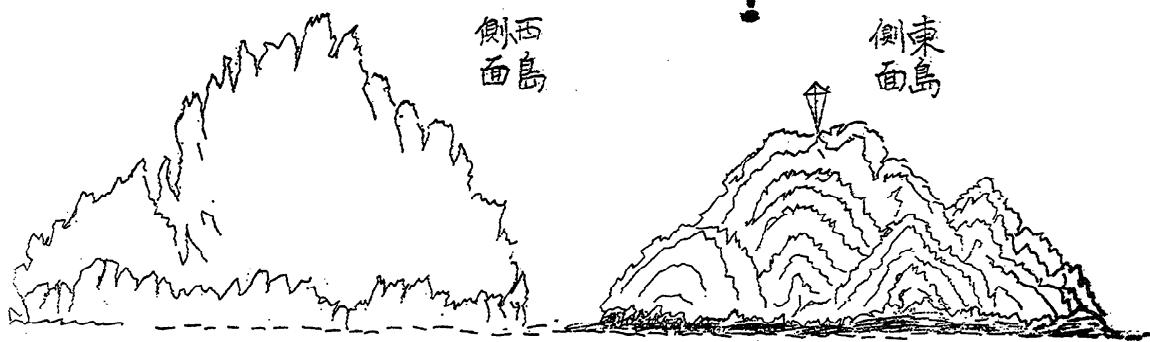
明治二十八年六月十日

海軍技手 木口玄五郎

第三艦隊司令官武富和鼎殿



0569



0570

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp>

竹島（リオンポルト岩）視察報告

余は仍り明治三十八年六月十日竹敷ヲ發シ同十三日午後二時竹島  
東嶼ノ東端約一哩ニ達シ停泊シ即時揚舟ヲ解シ航程長小倉大  
尉及其從屬森田中尉ヲ派遣シ望樓設置適否ノ調査ヲ命ズ  
此一行中ニ豫テ佐世保鎮守府ヲ派遣スル技手職工等ノ一行ヲモ  
含ムル

右派遣將校調査概要左如シ

一 竹島ニ座ノ列岩ヲ成シ礫石不毛小嶼ニシテ西方ニ位置スルニ大ニ  
シテ且ツ高シ（海圖標高約四百十呎）然レドモ四圍皆斷崖絶壁ニシ攀  
登スルカラス加之嶼上平坦ト認ムキ地テテ都テ峻険ト云々事此  
ニシ望樓設置ノ望絶ヘテシ

東方に位置をモル前者ヲ稍低シト雖モ（三百二十五呎ヲ概測し得ル）  
峻険ノ度稍緩且ツ辛クシテ攀登スルコトヲ得バ岬上皿状形稍

平坦ナル地面より多クノ土事ヲ施スル造屋物ヲ建設し得ベシ

一 建築材料ノ陸揚ハ並ニ頂上へ運搬 辛クシテ爲スコトヲ得先ヅ陸揚

場ニ就テ言ハシカ別紙見取畧圖ニ示スカ如ク東西ノ二岬ハ四座ノ小

立岩一際ノ礁脈ニ因リテ連鎖セシ其長サ約一鏈（水路誌ニ二鏈半

トアリ）礁上ノ水深ニ尋ル至三尋ニシテ優ニ小舟ヲ通スベク又四座ノ立

岩ハ恰モ破濤堤ノ用ニ東岬ヲ西走ル突角ト相待テ小港ヲ

形成シ小船舟ヲ繫維スル便アリ但シ偏西風ニ對シテハ余ヲ暴

露シ船舟ヲ繫維スルカラズ

此小曲湾ハ東岬ニ對テ唯下揚陸地ニシテ濱岸小平地ニ現

機夫ノ結作セテ敷個ノ紮屋アリテ三十有餘人ニ假住ス

山上ハ材料ヲ運搬スルコトアリク様ノモノヲ以テスルヲ便利トステ断



山崖攀登ヲ要ス箇所ニ索梯ヲ用ルモ亦一法ナリカ

一西嶼頂上ヨリ落チ来一水流脈アリモ極分多量ニシテロニトカガ

且ツ試驗ノ結果到底飲料ニ適セザルト別紙軍醫ニ依リテ為サ

シメテ試驗表ノ如シ

一望樓貞ハ小作盤餐上ニキ蔬菜培植ノ如キハ無論不可能ナリ

トト候ス如何トシハ嶼上硯角ニシテ坑ト土壤ト名ゾクヤキナリ且

ツ降雨少ナケタリ

以上派遣時核ノ視察ニ處シテ此派遣中本船ハ島ノ周囲約四哩

ヲ隔テ一週ヲ試シモ別ニ暗礁等ヲ觸目スルコトナキ但東嶼ノ

北東端ヨリ一礁脈走出シ其長サ約二鍾ト目測シ得ナリ

本島ハ日下海疆(Sea)ノ極季ニシテ陰岐國ヨリ渡来ノ獵夫等

ハ漁夫等(三十五名)ニ達シ小銃ト網罟ト用ヒテ海疆ヲ捕フ

其ノ獵獲ノ豐富尤見ルニ足ルキモナリ少時間ノ視察中彼等

ヲ捕ヘテ 談訖セシ處ホ 考考ニ 資ニキノ 價値アリテ 其概要  
ヲ左ニ掲ゲ

本島ノ海驢獵ニ於テ 一富場ニシテ 獵者ハ 陰曆四月申旬ヨリ 七月  
申旬ヲ 駐住シ 連日 獵業ニ 従事ス 海驢ヲ 得所ハ 皮ト油ニ  
之ヲ 大阪地方ニ 送り 毎々ノ 獲得金額 四千田乃至 五千田ナリト  
目下 獵夫ノ 指揮ヲ 司ルモノ 隈岐國中江 養三郎トシテ 本島  
ニテ 所司ガ 若シ 志望者アリ 本島ノ 冬季モ 駐住シテ 本島ニ  
本年ヲ 試ムル 志望者有スト

海驢ノ 外少量ノ 鮑ヲ 收穫スルヲ

氣候ハ 夏季ニ 於テ 口中 酷暑ヲ 感カレ 朝夕ハ 極テ 涼冷ヲ 覺エ  
最モ 炎暑ヲ 感カレ 旧六月ナリトス 又 濃霧ニ 多クシテ 降雨量ハ 本  
土ニ 比シ 極メテ 少シ

附近 潮流ハ 北東流ニ 如ク 其速力モ 少ク 交干 滿美ハ 約 四呎

報告者曰、四吠、多子、過、カ、如、ト、雖、毛、猶、夫、言、統、ノ、故、  
姑、リ、疑、ヲ、存、シ、置、リ

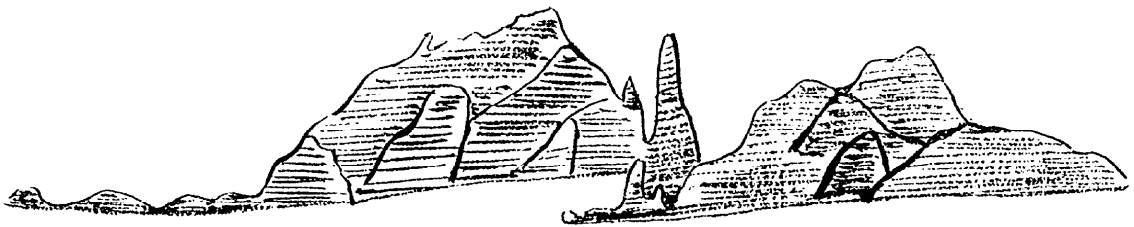
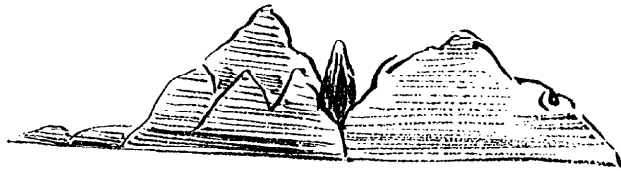
本島、ニ、廿、薪、水、ナ、シ、故、ニ、毎、日、二、回、帆、航、ヲ、以、テ、陽、岐、國、ト、交、通、シ、  
保、ノ、糧、食、薪、水、其、他、萬、般、ノ、供、給、ヲ、仰、ギ、是、ル、ト、云、フ、  
亦、報、失、候、也

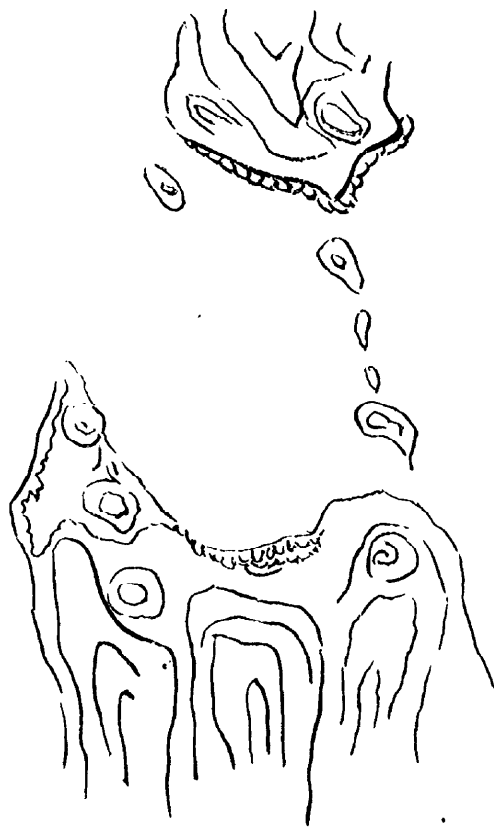
明治三十八年六月十五日

橋立艦長 福井正義

第三艦隊司令官武備邦鼎 殿







0578

竹島岩石間より湧出する水試験成績

臭

清濁

色

塩素

石灰

硫酸

硝酸

酸

有機物

捕

要

十

十

十

十

十

十

十

十

十

十

十

十

司令長官

参謀長

参謀

副官

参謀

八戦機密第一一號

八月廿五日進達

進達

一戦時日誌

自明治廿八年七月一日  
至明治廿八年七月廿五日

主簿

右別冊ノ通達進達候也

明治廿八年八月十日

第四艦隊司令官武富邦鼎

海軍大臣男爵山本権兵衛殿

供覽

丁機密第一三二號 八海

0580